

雄株混植割合10%におけるヤマブドウ（涼実紫）の結実特性

1 研究のねらい

ヤマブドウは雌雄異株であるので、ヤマブドウ県オリジナル品種涼実紫の栽培において、安定的な収量確保には雄株涼実紫3号の混植が必要である。

雄株は結実しないので、その本数割合を減じて結果樹を増やせば単位収量はあがる。そこで、これまで20%の混植割合で栽培試験を行ってきたが、効率的な栽培技術を開発するため、雄株が10%でも結実量が確保されるか試験を行った。

2 試験地と方法

滝沢村及び胆沢町において、雄株の混植割合を10%に低減させた試験地を設定した。1本あたりの結実重量と1房あたり重量を測定し、その平均値を混植割合47%の矢巾試験地と比較した。

3 結果

(1) 結実重量の比較(図1)

平成16年は豊作年であり目標収量を大きく上回った混植割合47%の矢巾試験地では1本あたり12kgを越え、混植割合10%の滝沢試験地でも同様にいずれも10kgを越え目標収量を大きく上回った。混植割合10%の胆沢試験地は収量が少ない傾向であったが、多収性品種では目標収量の6kg/本を上回っていた。一方、平成17年では逆に胆沢試験地の方が矢巾試験地より上回り、涼実紫4号及び5号では14kgを越え目標収量を大きく上回っていたことから、隔年結果性であり収量は混植割合10%でも遜色ないと考えられた。

(2) 結実果房の比較(図2)

平成16年の滝沢試験地では涼実紫5号が75gを越えていた他は、矢巾試験地、胆沢試験地では約50gと同程度であり、17年でも多収性品種ではいずれも約50gと混植割合10%でも遜色なく、果房の小型化は見られなかった。

4 成果の活用

雄株涼実紫3号の混植割合10%でも収量が充分確保できることが明らかになったので、涼実紫の栽培では結果樹である雌株を90%の本数割合で植栽することで、単位収量アップを図ることができる。



混植割合10%での結実状況

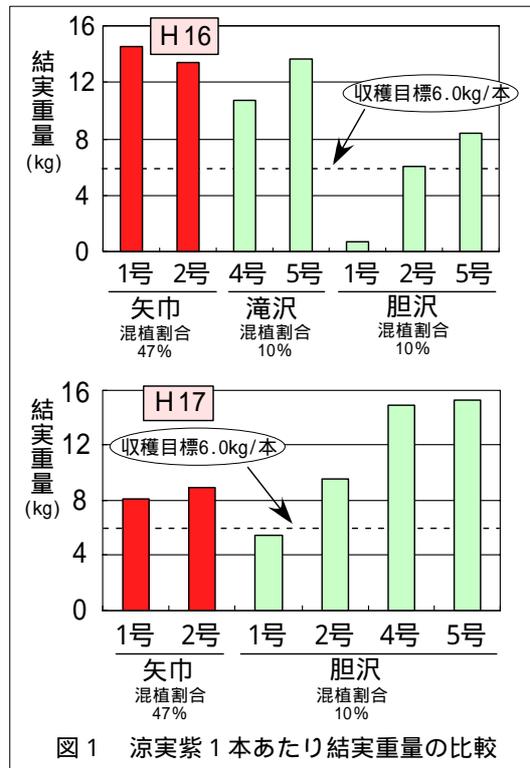


図1 涼実紫1本あたり結実重量の比較

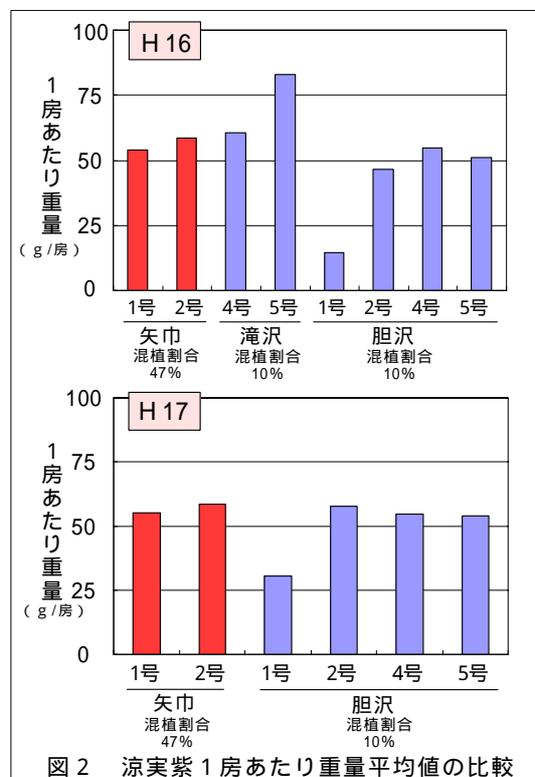


図2 涼実紫1房あたり重量平均値の比較

(担当 林産利用部 主任専門研究員 泉 憲裕)